120424　第２回「国語教育法」講義感想

タイトル集

感想集

1　●●
○授業では「教科書から読みとること」が大切である。
○今日の授業の問の答えは、教科書の注釈にありました。普通に読んでいたら気づかなかったと思います。教科書をすみまで読むこと、そこから答えを生徒に読みとらせることが大切かなと思いました。
　自分が中学高校のときは、生徒に全部訳をさせる先生や文法を全部聞く先生もいましたが、バランスがとれていてよかったと思います。先週も書いたのですが、先生がジョークをまじえることでクラスの雰囲気もよかったし、失敗を恐れずに答えることができました。

2　●●
○授業では「その教科のおもしろさを伝えること」が大切である。
○勉強というものは暗記といった苦しい作業をしなければいけません。ですからその授業、科目のおもしろさ、例えば古典において「過去」は大切であり、心情を伝える重要な要素として使われていたといったような所を教えてあげれば、生徒は苦しい作業も行うようになると思う。
　「聞き取れなかったところがある？」と確認してくれると、生徒としてはとても安心感を持つと思いました。高校時代は古典の授業でいつもビクビクしていたので、嬉しかったです。

3　●●
○授業では「おもしろさ」が大切である。
○興味を持ち、おもしろいと思えるから集中して授業を聞くことができ、頭を使って考えることができるのだと思います。
○いくらためになる話でも、おもしろくなかった印象に残らず、生徒の頭の中に残らないはずです。「へ～、なるほど」と感じ気づくことができるおもしろさに、授業の魅力はあるのだと感じました。
　いる・あるの説明が特におもしろく、納得させられました。授業のテンポもとてもよく、集中して聞くことができました。

4　●●
○授業では「余談」が必要である。
○生徒への質問や詳しい説明などももちろん大切な事だとは思いますが、何よりも大切なのは、その内容について想像を膨らませることが出来る余談だと思います。自分の経験からしても、例えば古文の「ゆかし」などの言葉の意味がわかってれば普段の会話のネタとしてわざと使えるし、最近の研究についての余談への驚きや発見は、本文の内容や注では絶対に知り得ないことです。何よりも生徒が楽しめる、そして教師も新たな発見や研究の面白さに気づくことができるのではないでしょうか。
　この２回の間いろいろな発見ができてとても楽しかったです。同じ教材を何度も色々な生徒に教えていく上で、自分の発見もありそうだなと、教職に就くことへの期待が増えました。

5　●●
○授業には「（空気に）負けないこと、（授業を）投げださないこと、（教材研究から）逃げ出さないこと、（自分を）信じ抜くこと」の４つが大切だと思います。
○不慣れなことに挑み、時として駄目になりそうになることもあるでしょうが、そんな時こそこの４つがいちばん大事なものに変わるのでしょう。
　塾の時間講師をしています。ある時生徒（小学生）から、「どうして国語をここまでやんなきゃいけないの？」と聞かれました。当時は何か言って返してあげたのですが、正直、自分もよく考えると答えが見つかりません。どうしてですか？　お願いします。

6　●●
○授業では「生徒に興味を持たせ考えさせること」が大切である。
○単純に興味をひかれれば、それに取り組もうとします。保戸塚先生の授業では、生徒に答えさせ、そのテンポもよく、質問に答えたい！と思えます。そうすると、文章を何度も読み、自ら考え、答えを出そうとします。その答えが、正解でもそうでなかったとしても、「よく考えて」導き出したものなので、その思考の経緯は忘れないし、答えが間違っていたとしても、逆に印象深く記憶に残り、答えや解説まで覚えていられると思います。また、何かで授業と関連することに出くわした時、忘れかかっていたら、思い出したい、調べようと思うことができるでしょう。

7　●●
○授業では「生徒に考えさせること」が大切である。
○前回の現代文の授業はうけられなかったですが、今回の古文の授業を受けて、久しぶりに「自分で考え、答えを出す」ということをしたと思います。単語の意味にしろ、問題にしろ、生徒に考えさえ、答えを出させることが授業では大切なのではないかと思いました。単語の意味、活用を自分で考え、更に答えると、生徒の頭には必ず強く残ります。問題を解くために本文を読み、想像すると、必ず力になります。その繰り返しを行うことで、国語の力はついていくのではないでしょうか。ただ情報を提供するだけではなく、生徒自身に考えさせ、たとえ出た答えが間違っていたとしても、考える過程が大切であり、たくさんの文章を読み解くことで、答えまでに至る力が培われていくのだと私は考えます。
　久しぶりに授業を受け、とても楽しかったです。私は国語が大好きで、古典の授業を楽しみにしていたことを思い出しました。高校の時の先生は、”教科書に書き込んでどんどん汚せ”と言われていました。今度もしっかり学んでいきたいと思います。

8　●●
○授業では「生徒との触れ合い」が大切である。
○先生が伝えるだけ、生徒が受け取るだけの授業は、淡泊なものになると思う。一斉授業だからこそできるのが全員が参加するということ。先生の問に生徒が向きあって考え、発言し、例え間違ったとしても、その間違いにも他の生徒が学ぶものはあると考えます。今日も、最後の問で、私自身予期しない答えを述べていた人がいたのですが、何故そういう解答になったのかまで考えることができた。だから、全員参加できる形の授業が大切だと思う。

9　●●
○授業では「生徒自身を参加させること」が大切である。
○二つの授業を受けましたが、どちらも生徒自身が答えを言ったり、考えたりする場面が非常に多いと感じました。ただ先生が話したり、板書することを聞いたり写したりするだけでは、やはり授業に飽きてしまいがちですが、今回、前回の授業のような、生徒参加型の内容ならば、楽しく学ぶことができると思います。
　生徒に次々答えさせることで、教室の緊張感は保ちながらも、発言しやすいリラックスした雰囲気を作り出せるのがすごいと感じました。

１０　●●
○授業には「先生のリード力」が大切である。
○前回の『羅生門』と今回の『徒然草』の授業を受けて感じたのは、何よりも「面白い」ということです。では何故面白いと感じたのでしょうか。僕は、先生のリード力があるからだと思います。授業のメリハリや切り替えとも言えるかも知れません。生徒に考えさせる時間、ノートを書いてもらう時間、話に耳を傾ける時間、そして先生の冗談で笑う時間、等というように、全てが一つの授業の中に自然に流れるように組み込まれているような気がします。もちろん、先生が導入や説明時に話す豆知識や最近の研究の話で、生徒の関心や感動を起こし、さらに発言しやすい雰囲気づくりをするという工夫は、先生が取り扱うテーマや作品をよく理解し、どう授業を組み立て、どう生徒の意欲に結びつけるのかという事前の準備と、授業を先生自身も楽しむ気持ちによるものだと思います。この二つがなかったなら、面白い授業を展開するリード力は生まれないと感じました。

１１　●●
○授業には「コミュニケーション」が大切である。
○先生の授業を受けて一番感じたことは、一方的な授業ではないということです。生徒に意見を聞くことはもちろんですが、聞いている生徒の表情や反応にも視線を配っているなと思いました。教科書の内容だけでなく、身近なものに関連した話を出して盛り上げているところも、ただ覚える、学ぶというだけでなく、授業を使って生徒たちとコミュニケーションを取っているというように感じました。先生と生徒の関係性には、信頼が不可欠だと思っています。ただ勉強を教えるだけでなく、授業をうまく使って生徒と良い関係性を築いていきたいです。

１２　●●
○授業には「生徒が楽しく参加できる雰囲気作り」が大切である。
○生徒たちがその教科の成績を伸ばしていけるかは、もともとその教科が好きな生徒にはより好きに、嫌いな生徒は大好きになれる授業作りが重要であると考えるからです。教師がただ作品を朗読し、知識を押しつけるだけでは、生徒は飽き眠ってしまいます。いかにその作品や題材に興味を持たせ、積極的に参加したくなるように、授業の雰囲気を作れるかが教師の大切な役割だと思います。失敗を恐れさせない質問の仕方や生徒自身に引きつけた例によって説明するなど工夫の可能性は沢山あります。前回も今回の授業も、７限であるのに、疲れを感じず、楽しく授業を受けることができました。ありがとうございます。

１３　●●
○授業には「気配り」が大切である。
○授業というのは、生徒のためにあるものなので、生徒の表情や手の動かし方を見て行う必要があると思う。生徒の反応があまりに悪いと、授業としてはよくないと考える。自分は生徒が興味をおもてる授業作りをしていきたい。
　前回の小説とは異なり、あまり板書というよりも、各自メモを取るという形なんだなぁと驚きました。古典の文法を知らない１年生にも、まず想像させることは大切だなと思います。古典において先生は予習を期待するということでしたが、どのような予習をしてこさせるのですか？　古典も教え方一つ変えるとよりいっそうおもしろくなることが分かったので、自分もそのような授業ができることを目指していきます。

１４　●●
○授業は「キャッチボール」が大切である。
○ただ一方的に説明するだけでは面白みに欠けるし、生徒はついてきてくれないんじゃないでしょうか。教師の側が質問を投げかけてあげれば、生徒は答えを探そうとして授業に入ってきてくれます。見つかった答えが間違っていれば、それに対してどこが違っているのか、どう考えればよいか、教師の側も教えてあげることもできます。お互いの受け答え（キャッチボール）で授業は作り上げられていくものだと思うので、大切だと考えました。

１５　●●
○授業では「書くこと」が大切である。
○パソコンや携帯電話が普及し、活字離れが囁かれる今日、文字を書く、書かせるという行為に私は大きな意味があるのではと考えました。書いて手に覚えさせることによって、語彙・句法・読み・書きと、日本人としての「国語力」もまた、板書をしている内に少しずつではありますが、自然と身について行き、ひいては日本人の活字離れを阻止することにも繋がるのではないかと考えたからです。

１６　●●
○授業には「考える力」が大切である。
○２回の授業を受けて、授業に関しては生徒が自ら考えるという作業が不可欠だと思いました。本文の大まかな内容を把握するのにも、文中から重要な語句を探すのにも、考えることが必要です。ただ、知識を教師から学ぶという受動的なものではなく、自ら考えることにより学習していくことで、生徒にとっての有意義な時間となり、よりより授業になると思います。そのための工夫が、生

徒をあてて答えさせる形式であったり、本文から語句を吹き出す等の作業です。これは生徒が飽きることのない授業であり、自分で考えることで、授業で得たことを一生忘れないだろうと思います。何よりも中・高生の豊かな想像力を引き出してあげられれば良いのだと考えます。

１７　●●
○授業では「自分で考えさせること」が大切である。
○「現代文」と「古典（古文）」の授業を受けて感じたのが、難しいことでも一度は考える時間を与えて「自分で考えさせる」ことが多いということでした。授業の冒頭で、先生が「同じ内容（題材）を扱っても新しいことを入れるようにしている」とおっしゃっていましたし、「考える」ことで得られる「新たな発見」「気づき」が生徒の感性を豊かにするのではないかと考えたからです。（授業で生徒を「詠嘆」させたいと思いました。）

１８　●●
○授業では「扱う教材の面白さを伝えること」が大切である。
○授業で第一に最低限なさなければならないのは、用いる教材をきちんと生徒に理解させることだと思っていたのですが、先生の授業を受け、結局教材を理解するということは、その教材の本質部にある「面白さ」を理解することなのいではないかと思いました。文学が教科書に載る理由は、恐らく「読む価値があるから」とか「教養として読むべきだから」というよりは、「面白いから」なのではないかと思います。（現にその作品を面白いと感じて人生を棒に振った研究者がたくさんいるわけですから）　その面白さを生徒に伝えることこそが、授業において大切なことではないのかと私は思いました。

１９　●●
○授業には「生徒に考えさせること」が必要である。
○先生の授業を受けて新鮮な気持ちになったのは、おそらく私が高校時代＜受身＞の姿勢だったからだと思います。受けてはいるのだけれど、どこか自分の知らないところで授業がすすむ、そんな感じでした。こうしたことから、「生徒に考えさせる」つまり授業に積極的な生徒や、思考しそれを発表することが苦ではない授業をつくることが大切であり、必要なことだと思いました。

２０　●●
○授業には「意図」が大切である。
○近代小説、評論文、古文、漢文といった国語科の授業で扱う文学は、何かしらの意図やメッセージが込められているのだと思います。それらは、評論文では繰り返し述べられるテーマとして、何度も書かれていることもありますが、小説などでは、何気ない一文に重い意味を持たせている場合が多いです。授業を受けて、生徒が以前より粉かな箇所に注意して文章を読めるように育てることは、国語科の授業が持つ目標であると思います。

２１　●●
○授業には「生徒を自然に参加させるような雰囲気」が必要である。
○授業は教師が生徒に何かを教える場ですが、教師が一方的に説明をしているだけでは、教えられても身につきにくいと思いました。生徒に発言させる雰囲気を作り上げることで、勉強する姿勢というものが身についてくる気がします。私は当時より熱心に授業を聞いたような気がします。勉強するのは生徒自身ですから、やはり授業も先生の話を聞くだけの場ではなく、生徒自身も勉強していくような場にしたいです。

２２　●●
○授業では「一つの語句も見落とさないようにし、それらをまとめて論理的思考ができるようになること」が大切である。
○羅生門も徒然草も、高校のときの記憶にない深い考察をすることができました。ともに、わずかな語句を頼りに物語の真意、作者の意図を模索しようとする授業内容が楽しかったです。高校時代は、担当の先生がそんな話をしていたのかも知れませんが、話術がイマイチだったのか、それ以上に自分たち生徒が聞く姿勢を作れていなかったと思います。授業がつまらないものというレッテル

を生徒たちが貼ってしまう前に、面白いものだと植え付ける、あるいは、剥がすような面白い授業をする努力や考えが必要と感じました。

２３　●●
○授業には「教師側の入念な準備」が大切だと考える。
○教師が準備を怠れば、テンポ良く分かりやすい授業を展開できないと思う。もちろん、授業は生徒たちとのコミュニケーションで成り立っているので、予想外の答えや質問等は出ると思う。しかし、教師ならば、その場面場面で適切な対応をしなければならないと思うので、そういった適切な対応をするためには、授業直前での準備はもちろん、教師を目指す学生のうちからの準備も大切だと考えるからである。

２４　●●
○授業では「リードとテンポ」が大切である。
　先生が一方的に話して生徒がそれを聞いているだけ、という授業はつまらない授業の典型だと思います。かといって、挙手させたとしても、特定の人ばかり発言して一部の人は授業にまったく参加していないといった風になってしまうかも知れません。また個人、全体の生徒が先生の問が分からなくて答えにつまってしまった時、いつまでも無言が続いて雰囲気がだれてしまうかも知れません。だから先生が授業全体を導いて（生徒に無造作にあてる、わからないようだったらヒントを出す）時間いっぱいうまく回していくことが、生徒の集中力が切れず、「面白かった」と思える授業になるのでは、と思ったからです。

２５　●●
○授業では「生徒とコミュニケーションを取ること」が大切である。
○教師が一人でただひたすらに話し続ける授業をするのではなく、生徒に答えさせることで、考えさせることができ、なおかつ、一定の緊張感や集中力を持たせ続けることができるから。
　授業を受ける前は、徒然草なんてやった覚えがないと思っていたのですが、本文を読んでいたら、高校の時も授業中に全員で音読したことを思い出しました。先生の話をずっと聞いているだけの授業ではなく、常に何かを探したり、問題を答えたりする授業だったので、時間が過ぎるのが、とても早く感じました。古典文法と、私たちの身近な言葉を結びつけて話をするのが、わかりやすくて面白かったです。